



個性を重視した教育内容の充実目指しー 着実に変貌する函館大谷学園

～ 記念事業の一貫として～

「函館大谷学園多目的ホール」今年8月完成

1888年（明治21年）創立で、函館大谷短期大学、函館大谷高等学校、付属幼稚園を運営・経営する学校法人・函館大谷学園がさらなる特色ある発展、教育内容の充実を目指して着実に変貌を遂げている。

ここ数年来からオンリーワンを全面的に打ち出して生徒の個性を最重視し、2期制・単位制などの導入で評価高まる大谷高校、コミュニティ総合学科を設置するなどし、地域と一体になった大学に生まれ変わる函館大谷短大、というように同学園の新時代を見据えた改革はこのところ一段と本格化し、地域の未来を担うフレッシュな若者の育成、教育への様々な新機軸は大いに注目されるものとなっている。

そして、2008年には学園創立120周年を迎えることから、これに向けての5年間にわたる記念事業がすでにスタートし、その柱として歴史と伝統を貫き存在意識を高める総合学園としての「教育活動の推進」をかかげる中で、現在、工事費1億8千万円を投じて「函館大谷学園多目的ホール」の建設を進めている。

短大を中心に高校も幼稚園も利用、各種講演はじめ演劇、演奏会、コンサートなどあらゆる試みにフレキシブルに対応できる、記念事業の一貫としての多目的ホールの建設であり、電動式移動観覧席などの設備を持っていち早く今年8月に完成するー。

「記念事業最大の眼目は「教育活動の推進」！
全体で大谷を今一度再生・発展させて行くことがテーマ」

函館大谷学園はさかのぼること116年前の1888年（明治21年）に創立された。仏教六宗派寺院によって六和女学校として始まり、1902年（明治35年）には真宗大谷派東本願寺に経営が一任され函館大谷女学校と改称、1923年（大正12年）には同高等学校となり、1948年（昭和23年）の学制改革で函館大谷高等学校に校名を変更した。

1963年（同38年）には女子教育の向上を目指し函館大谷女子短期大学を開設し、併せて付属幼稚園2園（昭和40年・44年）を設置した。また、1967年（同42年）には地域の要望に応えて高等学校男子部を併設し、これを発展・向上させるため1984年（同59年）には男女共学とした。

オンリーワンを全面に様々な新機軸！

2期制・単位制カリキュラム 高大連携

オープン選択授業 < 20数名の外部講師・25講座 >

コミュニティ総合学科の新設 公開講座・社会人特別講義 < 短大 >

幼稚園の地域開放

< 幼保一元化 >



2008年の創立120周年記念事業の一貫として今年8月に完成する「函館大谷学園多目的ホール」(ページ44の写真は外観完成パース)

特色ある発展、

2008年 創立120周年

注目される若者育成、 新たな教育への取り組み

さらに、2000年(平成12年)4月には短期大学についても男女共学を実施し、校名を函館大谷短期大学と改称、総合学園としての広範な教育分野に使命を果たしてきた。

こうして、平成20年(2008年)には晴れの創立120周年を迎えることとなり、このための記念事業が協賛会(名誉会長・仁禮文秀函館大谷学園理事長、会長・陰山静子函館大谷学園同窓会会長)もでき、すでにスタートしている。

送り出した同窓生は「約1万8千人を数える」(大谷学園・谷藤雅通常務理事)といい、この創立120周年を契機に「学園発展の足跡を振り返り、その偉業を学び、謝恩の念を捧げるとともに、親鸞聖人の教えを基にした人間教育を基礎とし、地域の要請に応える教育内容の充実を図ることはもとより、未来への飛躍を願い、本学園の更なる発展の礎を確固とするために、学園関係者、同窓会、後援会、PTA、母の会が合い図り記念事業を行う」(記念事業協賛会の趣意書)としている。

記念事業としては、例によって2008年秋に記念式典・祝賀会を開催するほか、創立120周年記念誌の発行、創立120周年に向けての教育活動推進、学園多目的ホールの建設、高等

学校・幼稚園の環境整備の5点を上げ、とりわけこの中では「教育活動の推進」を最大の記念事業として位置付けている。

言うまでもなく、時代は少子高齢化に突入し、子供の数がどんどん減少し、函館・道南においても中学卒業生の減少がすでに現実のものとなり、高等学校、そして短大・大学を取り巻く環境は年々厳しさを増している。保育所・幼稚園にあっても事情は変わらない。勢い、公立、私学を問わず、如何に生き残りを図るかのサバイバル時代に入っている。

このようなことから、「創立120周年を迎えるに際して、本学園経営の高校、短大、幼稚園の各教育内容の一層の充実、特色ある発展を図るということ」で、教育活動の推進が記念事業の最大の眼目。全体で大谷を今一度再生・発展させて行こう、これをテーマにしている(谷藤常務理事)とし、ここ数年來から積極果斷に進めてきた改革をさらに推進するというものになっている。

そして、この事業のシンボルともいべき形の施設建設として「函館大谷学園多目的ホール」の建設が打ち出され、今年春から着工、高校・短大のキャンパス内で工事が進行中だ。120周年は4年余先であるが、前段の事業として工事費1億8千万円

を投じて押し進められ、今年8月の完成を目指している。

建設に当たっては、「各種講演はもとより、演劇、演奏会、コンサートなどあらゆる試みにフレキシブルに対応できるゆとりある多目的ホール」をコンセプトとし、「主に大学が使うが、高校、幼稚園の教育活動にも活用する。同窓会室を併設し、110年余にわたる本学の歴史的な資料を保存、学生が気軽に利用できるスペースも設けた」（関係者）としている。

床延べ面積834・9平方メートルで、多目的ホールとしての講堂をメインに、音楽練習室、同窓会室、学生カフェテリア、幾多の一般控室などを備える。

講堂（多目的ホール）は観覧席186席、予備席40席の計226席で、最大の特徴は電動式移動観覧席であること。ボタン一つで壁面への収納し、900平方メートルのフラットなイベントスペースが作れるほか、電動式スライディングウォールや各種の設備、機材を組み合わせてすることで演劇、演奏会、コンサートなどいろいろなイベントに対応できるようになっている。観覧席を半分残すとか、各種スタイル、バリエーションが可能という。「機能性を持たせた多目的ホールで、全国的にも初の施設

になる」（同常務理事）と語る。外観白を基調とした、すっきりし

大きな反響・関心集める公開講座

「函館大谷高校」 特筆すべきはオープン選択講座

記念事業の柱である教育活動の推進ということでは、基本方針として「親鸞聖人の教えを基にした人間教育を基盤とし、地域との連携を深め、地域のニーズに応える教育を展開する」とし、学園では函館地区唯一の仏教の学校ということから宗教教育の推進、関係寺院・同窓会との連携の強化、総合学園として部門間の連携強化を打ち出している。

短大の同窓会が未組織になっているなどの現状もあり、すでに高校と大学が連携し（高大連携）、クロス教育を始めていることから同窓会の連携・統合などを検討するほか、お寺が50くらいもあるとして、これとの連携強化も進める意向だ。

大谷短期大学に関しては、100%の就職率を誇るなど地域のニーズに答えている幼児教育科の一方で、従来の生活科学科（旧家政科）に替わってコミュニケーション総合学科を新設したことから、この学科の充実・発展を図

たハイセンスの「OTANI HALL」が誕生する運びに

なっている。

る。

また、地域の方々への開放ということでおそろおそろ始めたいところ、思いもかけぬ大反響を得たとしている公開講座の更なる推進を前面に打ち出している。

すでに具体的には6月から来年の3月まで全19回もの公開講座の日程が月2回の開催で組まれているなど地域に開かれた大学を目指し、本格的に動き出している。ちなみに2、3の講座名を見てみると、「どうすれば子どもは自ら学ぶようになるか」（6月5日）、「介護者の人間的・効果的な基礎技術を」（7月3日）、「君もスターにテレビドラマ講座」（10



「一人ひとりの可能性に応える」函館大谷高校ならではのオープン選択講座

月2日)「かしこい子育てについて」(11月26日)、「やさしいクラシック音楽入門」(11月20日)等々、ほか興味深い、あるいは気軽に楽しめるプログラムが幅広く用意。外部講師も数多い。

大谷高校については、芸術・文化・スポーツの少人数個性化教育活動の推進と宗教・芸術・情報活動の地域講座の推進を基本方針に上げている。

オンラインワンは今や大谷高校の代名詞ともなり、生徒の個性を重視する教育としての2期制・単位制の導入が行われ、その長所を生かした授業が実践されている。「自分のペースに合わせて勉強を進められ、やりたいことを探す」単位制カリキュラム。高大連携の授業も行われ、学習と進路の幅が拡大している。

数年来の改革に基づく3年来の基盤づくりが出来上がって、「この上は中身を充実し、発展させたい」と強調する。

で、ここで特筆すべきは「一人ひとりの可能性に広がる多彩な教育内容の実施」ということでのオープン選択授業の展開。クラスの様子を取り払って自由に選べるオープン選択ということであって、講座名を列記すれば「ピアニ、篆刻・ペン習字、パステル画、陶芸、書道、墨絵・ハンドクラフト、マリimba、フリースタイルダンスA、洋楽器、和楽

器、茶道、写真研究、合気道、手芸・調理、和太鼓、情報演習、ボランティア、ロシア語、英会話、生活と福祉、実用化学、英語、一般教養、漢字演習、応用数学」このように魅力あふれる講座が用意され、担当するのは26人もの時間講師の方々。週2時間取り入れられており、外部のいわゆる社会人講師によるオープン選択授業とあつて生徒には人気上昇の一途にある。「地域のそこの道のプロ・先生たちが講師に来てくれて非常に感謝している」(大谷高校関係者)。

今や、「生徒を送る中学校側の



函館大谷短期大学附属大野幼稚園

大谷に対する信頼度も高まり、評価が上がっている状況にある」(関係者)とされ、今年度の入学者数も昨年度より少し上回った。「統一入試」が瓦解し、「複数入試」元年になった昨年の場合、市内私学の中で大谷はかなりの健闘を示した。この4月、これを上回る入学者を見たわけで、オンラインワンを実践する改革路線に学園関係者は自信を深めている。「このうえはより一層先生たちに熱を入れてもらい、教職員一体となつて進めたい」(谷藤常務理事)と話にも力が入る。

幼稚園はどうか。幼保一元化といったことを視野に入れての幼児教育の充実、そして園の開放充実をさらに積極化する。

市内本通と大野町に短大附属の各大谷幼稚園を設けていることで知られており、両幼稚園共にその施設には定評がある。特に、附属大野幼稚園にあつては平成11年に改築が行われ、環境、施設内容など道内では一番というほどの評価がされている。

そして、昨今は地域の子どもも施設に入れるという園の地域開放が行われ、成果を上げてきている状況にあるといい、これをさらに推進する意向にある。

大谷学園―大谷高校・大谷短大は確実、着実に、特色ある教育、新たな発展を目指して変貌してきている。